



おかもと しゅか ちゃん
(3さい)

ケーキさんに なって
だいすきな イチゴや
チョコレートの ケーキ
をつくるの。ピンクい
るの すてきな おみせ
だから みんな きてね。



奥春別森の保育園のおともだち



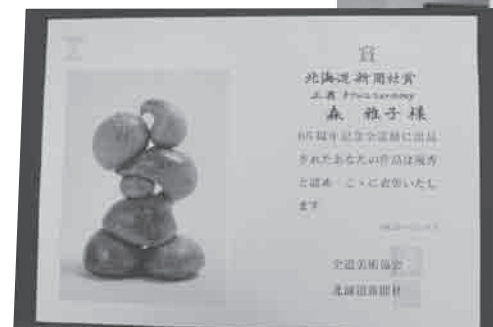
はやし けんせい くん
(5さい)

なんでも たべて おお
きくなって しょうぼう
しに なりたいんだ。か
じに なったら しょう
ぼうしゃに のって ひ
を けしに いくよ。

がんばっているあなたがすき

シリーズ・ひと

伝統工芸を基本とし、重んじながらも、
平和や環境へのメッセージを取り入れる
65周年記念全道展で北海道新聞社賞に輝いた陶芸家
森 雅子さん(77歳・奥春別)



摩周焼の窯元として活躍している森さん。全道展の工芸部門では最高の賞を受賞した今回の作品「オブジェ harmony」は、どのようにして生まれたのでしょうか。

「調和」をテーマにした作品を作りたいと、デザインを考え始めました。今は「丸」を強調した、角のない「和」のようなものを作品の中にキヤッチしたいと思っ

ていて…。いつもそうですが、デザインを決めるまでが本当に大変で、時間もかかります。イメージがなかなかかわかず、常に頭から離れない状態が何日も続きます。デザインが決まり、実際に作り始めてからは割と早いのですが。作品は、別々に作ったパーツをつなぎ合わせたのではなく、すべて1つの土からできていて、割れないように中は空洞になっています。

また、中心がぶれないように成形していくことに気を遣います。中心がぶれないということ

は、デザインの段階からいつも頭に置いていますね。

焼成はまきを使う穴窯で行います。一度の火入れで6日間寝ずに焼き続けるこの作業は、たくさんの人たちに支えられているといえます。

12月の一番寒い時期に切られた地元産のカラマツの間伐

材をまきにして、15ヶ月使うんです。この時期のカラマツは、栄養素を蓄え、水分を放出した状態。釉薬(うわぐすりのこと)をかけずに焼く作品の表面に、カラマツの灰がついて、自然の釉薬の効果を生み出します。不安の連続の6日間の寝ずの焼成ができるのは、お弟子さんをはじめ摩周焼のファンや知人、友人など、火入れに合わせて集まって手伝いしてくださる方々があつてのことです。今回の受賞の知らせを聞いたとき、協力してくださったたくさんの方々の方々がまず浮かびました。本当に感謝しています。

森さんの目指すこれからの

について教えてください。

「実家が割烹旅館だったため、小さいころから陶器を見て楽しむのが好きな子どもでもでした。陶器に常に触れて育ってきた私

が、陶芸の世界に身を置くようになったのは必然だったのかも

しれません。陶芸に携わるようになってもう40年以上になりますが、未知なるものに挑むわけですから、完成は不可能ですね。

伝統工芸を基本とし、重んじながらも、その中に世の平和や環境へのメッセージを取り入れることに、とても興味があります。また、そこに遊び心のある作風も私の好きな分野です。

※組歌：箏曲の一つ。独立した短編歌謡数首を連ねた歌詞を持つ曲。
※唄物：箏曲の一つ。楽器の演奏よりも歌唱に重点のある曲。

生田流琴友会は、1967(昭和42)年発足のおここの会です。ことと聞くと「琴」の字を思い浮かべるかもしれませんが、同会が学ぶのは「箏(そう)」という楽器で、一般的には琴と呼ばれています。現在の会員は20人。これまでに、15人が師匠の資格



生田流琴友会と都山流尺八錦山会の皆さん(合同演奏会で)
前列右から4人目が代表の辻谷さん

の資格を取得しました。奥深い古典を大切にしながら、組歌など唄物の大曲を勉強しています。

胡弓、尺八との合奏は、充実した大切な時間です。話すのは、代表の辻谷さん。1968(昭和43)年には弟子屈町文化協会に所属し、1994(平成6)年には中標津支部(指導：飯居武信寿)も設立しています。毎年、全国各地持ち回りで開催される国民文化祭には、韻の会(胡弓の会)として出演しています。

おけいこは毎日の積み重ねで、苦しいときもあるのですが「みんなの心が一つになって一つの曲を合奏する楽しさを感じられるため、おけいこを休む方はほとんどいません」。

一方で、地域の子どもたちへの伝統音楽の普及にも力を入れています。1985(昭和60)年に、町内音楽部会の指導を始め、児童・生徒との交流が始まりました。2002(平成14)年からは、中学校で伝統文化を学ぶことが必修となり、会

の皆さんのそれまでの取り組みが、図らずも地盤づくりに役立ちました。以来、中学校でも毎年、箏の授業を行っています。さらに今年、町内初の文化庁委託事業として「摩周おここ子ども教室」を開講。



生田流琴友会

代表・辻谷 武喜代さん
会員・20人



おここ子ども教室の様子

学校、教育委員会、地域の力により、小学校1年生~中学校3年生20人が箏を学んでいます。ほとんどが初めて箏に触れる子どもたちですが「子どもたちが喜ぶ顔を見て、頑張って演奏する音色を聞くと、力がわいてきます」と、辻谷さんは笑顔で話していました。